

第3部 百済の滅亡と百済王

——百済の王子豊璋と善光の命運——

百済の滅亡については第1部や第2部で述べましたが、我が国での百済王（クダラノコニキシ）氏誕生の前提として、もう一度その経緯を詳しく見ておきましょう。

百済は半島でもわが国と最も密接な関係にあり、極論すれば百済とわが国とは古代において全く一つの国のようであったという見方も出来るほどです。百済からの渡来人が本国（クムナラ）と呼んだのがクダラになったという説があることは既に紹介しました。東アジアの文化の伝来は殆ど百済から入ってきたと見てよく、わが国が百済から受けた恩恵は計り知れないものがあります。その百済が滅亡したことはわが国にとって大きな打撃でした。

1. 百済滅亡への道

百済は660年に新羅と中国唐との連合軍によって滅ぼされるのですが、半島に対する唐の野心と高句麗の地へ進出したい新羅が、同床異夢のかたちで百済を滅亡に追い込んだのでした。

（1）百済と新羅の抗争

① 聖王の戦死

高句麗の南進によって漢城から熊津へと後退していた百済にとって、高句麗への反攻態勢は変わらぬものがありました。聖王（523～554）は新羅と伽耶地域をめぐっての勢力争いを抱えながらも連携を模索し、倭国との同盟をも積極的に進めました。538年に首都を熊津から泗沘に移したのも、対高句麗政策上の観点から中国や倭国への海上交通の便を考えてのことだったでしょう。そして聖王は新羅と連携して高句麗を攻め551年に旧都漢城を奪還します。

北進して中国への交通路を確保したかった新羅は、高句麗に対する戦略的な思惑から百済と連携はしましたが、百済が奪還した漢江流域は新羅にとってどうしても手に入りたい地域でした。553年に新羅は漢城を攻めてこれを奪ってしまいます。漢城百済の旧地は新羅の支配するところとなったのです。新羅にとっては当初からの目的の達成であったのですが、百済から見れば新羅の変節ということになります。

そこで百済は新羅に対する戦争を仕掛け、聖王自ら出陣しますが大敗を喫してしまいます。日本書紀欽明15年（554）条にこの時の様子が書かれています。

「百済の王子昌は、重臣たちの反対を押し切って新羅討伐に出兵します。新羅国に入って久陀牟羅の柵を築きますがそこで孤立してしまいます。父の聖王は自ら兵を率いてこの救援に向かいます。新羅は聖王自らがやってきたことを知ると全軍を動員して道を絶ち痛撃します。新羅は佐知村の馬飼の奴の苦都に『おまえは賤しい身分だが聖王は有名な王である。この王を殺せばお前の名は後世までも伝わるだろう。』と言って聖王を捕らえさせました。苦都がうやうやしく『王の首を斬らせて貰います』と言うと、聖王は『王の頭は奴の手には掛けられない』と応えました。これに対して苦都が『わが国の法では、盟に背けば国王といえども奴の手には掛かるのである』と言ったので、聖王は天を仰ぎ嘆息して涙を流し、苦都を許して首を差し延べました。苦都は王を斬首して、穴を掘り埋めました。」

「王子昌は新羅軍に取り囲まれて脱出することが出来ませんでした。倭軍の中に弓の名人筑紫国造という者がいて、進み出て弓を引き、新羅騎馬軍の最も勇壮な者を射落としました。そして次々放つ矢は雨霰のようで、ついに包囲軍を退却させました。これによって王子昌と諸将は間道を通っ

て逃げのびることが出来ました。新羅軍は百済軍が疲れ切っているのを見て、全滅作戦を取ろうとします。しかしその時一人の将が『日本の天皇は任那のことでしばしばわが国を責められた。いま百済の滅亡を謀れば、必ず後に憂えを残すことになる恐れがある』と言いました。これによって新羅は百済への進攻を取り止めました。」

これは聖王が戦死した有名な管山城の戦いについての記述です。新羅はこの時倭国に対する配慮があって百済への進攻を行いませんでしたが、この戦いによって新羅は百済に対する優位を確実なものにしました。百済では、重臣の忠告を無視して出陣し聖王の死をもたらした王子昌に対して当然批判の声が上がったでしょう。王子昌はすぐに王位を継承することが出来ず、557年になってやっと即位しました。貴族間の対立が激しく合意が容易でなかった事情が窺えます。なおこのことは日本書紀の記述によるもので、百済本紀では聖王戦死後すぐに王子昌が即位したことになっています。

② 威徳王と任那滅亡

王子昌は弟の恵を倭に遣わして聖王の死を伝えます。そして555年8月、重臣たちに語って「父王のために出家して修道したい」と言い出します。それに対して重臣たちは、「思慮のない行動で大きな禍を招いたのは誰の過ちですか。今、高句麗と新羅が争って百済を滅ぼそうとしています。出家してこの国の祭祀を何処の国に授けようとされるのですか。過ちを悔いて出家することは止めてください」と言って出家を思い止ませました。557年3月になって昌はやっと王位を嗣ぎました。それが威徳王（554?～598）です。

威徳王は即位してからも倭や加羅諸国と連携を計りながら新羅との戦いを続けましたが、562年には新羅が高霊伽耶に侵入してこれを滅ぼします。日本書紀は、欽明23年春1月に新羅が任那の官家（ミヤケ）を討ち滅ぼしたと記しています。そして「総括して任那というが、分けると加羅国（高霊伽耶）、安羅国、斯二岐国、多羅国、率麻国、古嵯国、子他国、散半下国、乞滄国、稔礼国、合わせて十国である。」と述べています。これは半島の南を流れる大河の洛東江と荣山江に挟まれた地域の殆どを含んでいて、倭国がこの地域に何らかの権益を持っていたことが推察できます。そして、この権益を管理する官庁の置かれていたのが高霊伽耶と安羅だったようです。高霊伽耶は伽耶諸国の盟主的な存在でした。その高霊伽耶が新羅により滅ぼされたことによって、伽耶地域は新羅の支配下に入ってしまったことになります。また高霊伽耶に存在した倭の機関も滅ぼされて、任那日本府滅亡ということになったのです。

百済はこうして半島南部において新羅の進出をゆるして国力を減退させながらも、中国の政權とは国交を密にします。570年には威徳王は北齊から「車騎大將軍・帶方郡公・百済王」に封じられ、北齊が滅びて隋が興ると、581年に使節を送って「上開府・儀同三司・帶方郡公」に任じられています。隋は陳を滅ぼして中国を統一しました。中国への接近は対高句麗・新羅政策としては一定の効果を及ぼし、百済はしばらくの間2国との小競り合いを繰り返しながらも一応安泰な時期を過ごすことが出来ました。598年に隋が高句麗を攻撃すると、百済は隋に対して道案内の役を申し出ましたが、隋が高句麗に敗北して戦争が一段落し、話は沙汰済みになりました。しかしそのことを知った高句麗は百済に対して侵攻を開始することになります。

この間、百済は倭との親交を深めています。例えば577年、敏達帝は大別王と小黒吉士を百済に遣わしていますが、その帰還に際して威徳王は、経論若干と律師・禪師・比丘尼・呪禁師・



造仏工・造寺工の6人を献上しています。そしてこれは難波の大別王の寺に配置されました。因みにこの大別王の寺というのは、堂ヶ芝廃寺として知られる寺でありまた百済寺と考えられる寺であって、発掘調査の結果からJR環状線桃谷駅近くの観音寺がある場所と考えられています。境内に「堂ヶ芝廃寺」の石碑が立っています。

③ 恵王・法王・武王

598年12月に威徳王が死去し、弟の恵王が即位します。威徳王には太子阿佐がいましたが、推古5年（597）に百済の使節として来日しています。太子はそのままわが国に留まったのでしょうか。その動向はよくわかりませんが、とにかく太子ではなく弟の恵王が王位に着きました。恵王は即位したとき既に70歳を超える高齢だったようで在位1年で死去してしまいます。

次いで29代百済王となったのは法王で、仏教を厚く信仰し600年には王興寺の建設に着手しました。しかし6か月の短命で死去し完成は次の王の時代のことになりました。後を継いだのが武王（600～641）です。武王は法王の子というのが一般的な見方です。対新羅政策を重んじた威徳王が、武勇に長けた甥の宣（後の法王）を益山に送って都を建設させ、その時に地域の貴族の娘と結ばれて生まれたのが武王ではないかと言われます。また武王は威徳王の子であるという説もあります。威徳王が舞姫に手を付けて生ませたのが武王で、宮廷から離れて養育させたというのです。どちらから見ても正統な素性ではなさそうですが、これが薯童謠のお話しを生むことになったのでしょうか。いずれにしても新羅の王女を娶ったことや益山に一時的に都を持ったことは事実のようですから、対新羅政策上武王の果たした役割は大きかったでしょう。

高句麗の南下政策が激しさを増し、百済も新羅も対抗上中国隋の介入を求める動きが活発化しました。この動きの中で百済と新羅の婚姻関係が発生しても不思議ではありません。武王は隋に対して高句麗を攻めるよう上奏分を出していますが、隋は前漢時代から楽浪郡の利権を中心に争ってきた高句麗討伐に積極的で、612年には高句麗遠征軍を発しました。しかし武王は新羅を牽制する必要から高句麗とも手を結ぶ二重外交を行って、隋の遠征には呼応しませんでした。

隋は高句麗遠征に力を消耗して滅び、618年に唐が立国します。武王は624年にこの唐に朝貢して帶方郡王・百済王に冊封されています。626年には高句麗と和睦し、新羅を攻め立てるようになりました。新羅とは伽耶の地をめぐる、任那復興を試みる倭国を巻き込んだ抗争を繰り返していたのですが、627年には新羅西部に侵入し、更に熊津に軍勢を集めて攻撃態勢を整えました。新羅は唐に使いを送って仲裁を求め、唐の太宗はこれに応じて百済に和解するよう勧告します。武王は表面的にはこれに応じたものの、新羅との戦乱は止まるところを知りませんでした。

（2）義慈王と百済滅亡

① 義慈王の活躍

義慈王（641～660）は武王の嫡男で、641年に即位しましたが百済最後の王になってしまいました。義慈王が即位した頃は、高句麗・百済・新羅三国は中国唐と倭国を巻き込んだ紛争の激しい時代で、その時々利害によって同盟したり対抗したりと目まぐるしい動きを見せていました。義慈王は太子の頃から新羅への積極的な攻勢を画策し、倭との連携を一層強化するため太子時代の631年に王子豊璋と善光を人質としてわが国に送ってきていました。



義慈王は即位するとすぐに政治体制の改革に乗り出します。百済の政治は王を中心として貴族が取り巻く合議制であり、王がリーダーシップを発揮するためには、優れた文人であると共に戦争に自らが乗り出して勝利に導くというような武人としての力が必要です。聖王が自ら出陣して戦死したのもそうした背景がありました。義慈王はそうした行動力を持ちながらも、何事につけても足を引っ張るような貴族たちによる政治体制を改めたいと望んでいました。新羅の血が混じった義慈王に対しては、貴族たちの大きな疑心暗鬼があったものと想像されます。義慈王は642年に自分の母（新羅の王女）が亡くなると、先ず王族を含めた高官40名を追放しました。母の外戚に当たる王族や貴族たちの政治体制への介入を排除したのです。「今年1月、国王の母が亡くなりました。また弟王子に当たる子の翹岐や同母妹の女子4人、内佐平岐味、それに高名に人々40人あまりが島流しになりました。」と百済の使いが言ったことが日本書紀に記されています。同母兄弟姉妹を先ず追放したのです。自らも新羅の血を受け継ぎながら、新羅の血を受けた兄弟姉妹を放逐することによって新羅に対する強硬な姿勢を打ち出し、貴族たちの批判をかわしリーダーシップを確立したものだと思われます。島流しに遭った人たちはわが国に亡命してきました。

このような政策を断行した義慈王は、642年7月に新羅に対して自ら軍を率いて攻撃を加え、40余城を降伏させました。8月には將軍允忠に1万の兵を率いさせて派遣し、大耶城を攻撃しました。この戦いは百済の大勝となり、降伏してきた城主や妻子を斬首し、捕虜1千人を百済の西部に移住させました。643年には高句麗と同盟して新羅の党項城を攻めようとしませんが、新羅が唐に援軍を求めたため中止しています。このような矢継ぎ早の軍事的行動は王の権威を著しく向上させたことでしょう。

こうして百済は新羅に対して優位性を挽回していったのですが、このことは新羅が中国唐に接近する結果を招来してしまいました。唐は百済と新羅の和睦を勧めますが、644年から649年に掛けて両者の戦闘は激しいものがありました。そして金庚信の率いる新羅軍は649年8月、道薩城付近の戦いで百済軍を大敗させます。しかしその後も新羅との抗争は収まらず、655年には高句麗と組んだ百済は新羅の30城を奪取しています。この頃から義慈王は酒色に溺れ政治を顧みなくなりました。新羅に対して優位に立った傲慢心からと言われますが、新羅人を母に持った義慈王の複雑な心境がも大いに影響したのではないのでしょうか。新羅との和平も試みた武王の意思を踏みにじって新羅との抗争を繰り返し、その妨げとなった母一族の翹岐らを追放した義慈王は、大きな心の悩みを抱えていたでしょう。義慈王の態度を厳しく誡めた佐平成忠は投獄されます。そしてその後は諫言するものがいなくなってしまいました。

② 百済の滅亡

660年3月、唐の高宗は蘇定方に命じて13万の大軍を率いて山東半島を出発させます。そして半島の西海岸沿いを下って錦江河口へ向かいます。唐としては百済を攻める理由は無かったのですが、高句麗を攻めるために結んだ新羅の宿敵百済を先ず滅ぼして、その後で新羅と連合して高句麗を攻める作戦を取ることにしたのでした。百済とすれば唐が攻めてくることは全く想定外でした。百済は唐軍を白馬江（錦江）の下流に引き込んで迎撃す



白馬江（錦江）

る作戦を立てましたが、7月白江の戦いで大敗を喫することになってしまいました。一方新羅の武烈王・金庚信の軍3万は黄山で百済軍と一大決戦をすることになります。百済の將軍階伯は敗戦を覚悟して自らの手で家族を切り捨て、決死の戦いに臨みました。階伯5千の兵は氣勢を上げて新羅軍を攻撃し数度にわたってこれを撃退させますが、最後は新羅花郎の活躍によって殲滅させられました。

唐・新羅連合軍が泗沘城（扶蘇山城）に迫ると、義慈王と太子隆は熊津城へと逃れました。隆の弟泰は自ら百済王を名乗って泗比城を固守しますが、隆の子の文思が唐軍を退けたとしても自立した泰に殺害されるかも知れないと考えて唐軍に投降します。これを見た泰も城の固守はかなわぬものと投降しました。逃げのびた義慈王も百済の諸城を開いて降伏し、ここに百済は滅亡の時を迎えました。義慈王は妻子と共に唐の都長安に送られ厚遇を受けますが1年足らずして病死します。

日本書紀には、「新羅の春秋智（武烈王）は、唐の大將軍蘇定方の手を借りて、百済を挟み打ちにして滅ぼした。他の説では百済は自滅したのであると。王の大夫人が無道で、ほしいままに国権を私し、立派な人たちを罰し殺したので禍を招いた。気を付けねばならぬ、と。」と書かれていて、義慈王政権が晩年には退廃していたことを示唆しています。義慈王が一時期において国力を挽回し新羅に対して優勢に立つことによって、かえって内部に崩壊の芽を多く残したということになるでしょう。

なお、泗沘城や王宮にいた3千人の女官たちは、唐軍に追われて逃げ場を失い絶壁から白馬江（錦江）に身を投げました。その絶壁は女官たちの悲劇を伝えて「落花岩」と呼ばれ、今は扶余の観光名所になっています。またこの悲劇を題材にした物語や唄が多く作られました。

● 百済終焉の物語

「物語 韓国史」（金岡基著・中公新書）に百済滅亡時の黄山の激戦についての物語が書かれています。当時の雰囲気伝えてありますので、少し長いですが原文のまま転載させていただきます。

【階伯將軍と黄山の戦い】

660年の3月、唐の高宗は左武衛大將軍の蘇定方を神丘道行軍大總管に任命し、水陸合わせて13万の大軍が百済攻めに出発した。一方、新羅の太宗武烈王と金庚信大將軍は、精鋭5万を率いて王都から南川亭（いまの利川）に向かった。海と陸から唐と新羅の両国に挟み打ちにされた百済は、もう打つ手を失っていた。

義慈王がとつぜん正気にかえったとしても無理なことだというのに、王宮での重臣会議では統一見解すら見出せずに終わった。（中略）義慈王はとうとう配流中の興首に使いを出して策を聞いた。溺るもの藁をもつかむの心境であった。配流中の身とはいえ、興首は百済魂をもった將軍として救国の策を王に伝えた。唐の軍勢は数が多いだけでなく軍律が厳しい精鋭ぞろいである。それが新羅と合流すれば強大な勢いとなることは必定、平原での戦いはわが方に不利なのでさけるべきである。白江（錦江の下流の伎伐浦）はわが領土で、その峻険な地形を熟知しており、しかも集団戦がしにくいところである。そこで唐の侵入を防ぎ、新羅は炭俵で防ぎ止めるしか方法がない。また新羅の兵が炭俵を越えられないと、軍糧の補給ができないので、撤退するしか手がない、と使いの者に伝えた。

興首の忠言は、群臣会議では素直に伝わらなかった。配流の身であるから、王への恨みつらみが積もった策であろう、それを信用しては国が滅ぶ、という意見が支配した。階伯將軍が立ち上がり、興首の策しか敵を防ぐ手はない、と義慈王に決断をせまった。が、決断を下せる状態ではなかった。その間も、時間は止まってくれなかった。階伯は仁王立ちして、大声で叫んだ。

——口で軍はできぬ。敵も待っていてはくれない。わしは兵のもとに帰るが、来世でお会い申す。では、さらば・・・

と王室を出た。王宮の床に響く自分の足音が妙に悲しげに聞こえた。わしも弱気になったものだ、

と階伯は苦い笑いを浮かべていた。階伯は自分の館に向かって歩いていた。夫人とこどもたちを一室によんだ。この世で見納めになる家族の顔を、静かに笑顔で見回す階伯の胸のなかには涙であふれていた。こどもの頬をそっとなでながらいった。

——百済一国の力では、唐と羅（新羅）の勢いを止めることはできぬ。そなたも、この子たちも、捕らえられて奴婢にされるかも知れぬ。この父はそれを防ぐことができないのだ。生きて辱められるよりは、死んだ方がましであろう。・・・この父を許せ！

というやいなや刀を抜いて命を断った。階伯は兵のもとへ馬を走らせた。馬上の階伯の姿には怒りも悲しみもなく、それを越えていた。

階伯は5千の精鋭を率いて黄山の原野の険しい、攻めにくい地勢に陣を布いた。「最後の戦いは小計を弄さず、正面から戦って百済武士の意気地をみせてくれるわ」と呟いていた。家族まで殺し、すべての邪念を断った人間は強い。死を恐れる気持ちは微塵もなかった。将のころは以心伝心、兵たちに伝わっていた。黄山の原野は、嵐の前の静けさのように風ひとつなかった。とつぜん、階伯の大声が、静寂な空気を破って天地にとどろいた。

——昔、越王の句踐は5千の兵をもって、呉の70万の兵を破った。その故事に倣って、今日は各員が大いに奮励し、勝利をおさめ、国恩に報い、百済武士の意気地をしめそう！

階伯の檄に5千の兵の喊声が、数万に優る声となって天地にとどろいた。それを合図に両国は激突した。階伯は兵を3軍にわけて、敵の兵力を分散させる策をとった。原野を走り回る5千の百済の兵は、一騎当千の兵に変身をとげていた。そこにはかつての不甲斐ない百済兵の姿はなかった。金庚信も軍を3つに分けて戦いが始まった。豹変した百済兵の勇姿に首をかしげたのは金庚信だけではなかった。新羅の兵は出鼻を挫かれ、後退しはじめた。辛うじて数によってそれを支えていた。5千の百済兵が多勢の敵と4回の激戦を展開し、しかも一進一退の戦況を保っていた。

このとき、新羅の將軍の欽純は子の盤屈に、「臣になっては忠を尽し、子になっては孝を尽すもの。危急の場に遭遇して命を捧げれば、忠と孝を同時に全うすることができる」と語った。父の話が終わるやいなや、盤屈は武器を手にとって敵陣めがけて馬を走らせ、突撃して見事な戦死をとげた。それを見ていた左將軍の品目は、子の官昌を馬の前に立たせ、わが子はまだ16歳であるが、意志は強く、すこぶる勇敢である、と諸將に向かって語った。そして官昌に向かって、「この戦いでお前は三軍の模範になれるか」と聞いた。「はい、なつてご覧に入れます」というやいなや、官昌は槍を持って馬に跨り、敵陣に向かって突進していった。官昌は捕らえられて階伯將軍の前に引き出された。階伯が甲冑を脱がせてみると、なんとまだあどけない少年であった。いくら戦いとはいえ、幼い少年を殺すに忍びなかった。それよりもその勇敢な行動を敵ながら称えたかった。官昌の送還を命じた階伯の脳裡に勝敗がみえてきた。これでは新羅に敵うはずがない。幼い少年の兵ですらこの勇敢さ、壮年の兵はいうまでもなかろう、と呟いていた。

一方、階伯に命を救けられて見方の陣に戻った官昌は、父の將軍の前に跪いた。

——父上、わたしは敵陣に入つて將軍の首も斬れず、旗一本奪えませんでした。それは死を恐れたからではありません。忠孝の二字を忘れてはおりません。

というやいなや、井戸水をぐいっと一杯飲み干すと、敵陣めがけて突進し、奮戦し、捕らえられた。階伯は官昌の首を斬り、かれの馬の鞍にくくりつけて放つた。戦国時代の武人の情がそこにあった。父の品目は、わが子の首を手にとって、「おお、お前の顔は生前とちつとも変わつておらぬ。国王のために死んで忠を尽した。父は忘れぬぞ」と流れ落ちる血を袂でそつと拭うのであった。

盤屈と官昌の勇敢な戦死によって、膠着状態にあった戦いに大きな動きが生じた。新羅の三軍の士気は絶頂に達し、死を恐れない兵に豹変して、鼓を打ち鳴らし、喊声をとどろかせながら敵陣に向かって怒濤のように押し寄せた。その勢いは天にも止めることができなかった。

階伯は槍を取ると馬に跨り、最後の場をもとめて敵陣めがけて突進していった。その戦いぶりをみていた金庚信は、百済は滅ぶともそこに將あり、と敵將の武勇を称えていた。階伯の戦死をもつ

て、この軍は実質的に終わった。百済の衰運を止める術はなかった。

盤屈や官昌のような貴族の少年を新羅では花郎とよんでいた。金春秋も金庚信も花郎の出身で、かれらが統一新羅を樹立する文武の礎になった。百済も高句麗も、この花郎道に精神に負けたのであった。――

2. 百済復興運動

百済支配のために唐は熊津に都督府を設置し、その長官に王子隆を指名して旧領の支配に当たらせました。百済が滅亡したといって百済全土が新羅軍に占領されたということではなく、百済の各地はそれぞれの貴族豪族による支配が続いていました。それらの貴族を都督府の支配下にいれようとしたのです。しかしその貴族たちが百済復興に立ち上がります。

(1) 復興運動

① 鬼室福信らの活躍

日本書紀によりますと、百済の王城が陥落したとき「西部恩率鬼室福信は激しく発憤して、任射岐山に陣どった。中部達率余自進は、久麻怒利城に拠り、それぞれ一所を構えて散らばっていた兵を誘い集めた。武器は先の戦いの時に尽きてしまったので、つかなぎ（手に握る棒）で戦った。新羅の軍を破り、百済はその武器を奪った。すでに百済の兵は戻って鋭く戦い、唐軍はあえて入ることが出来なかった。福信らは同国人をよび集めて、共に王城を守った。国人は尊んで、『佐平福信・左平自進』とあがめた。『福信は神武の権を起こして、一度滅んだ国さえも興した』といった。」ということです。

唐や新羅との戦いで散り散りになっていた兵士たちが各地の貴族の呼び掛けに応じて集まり、また新羅軍から武器をも奪って立ち上がった様子が伝わります。しかも一度滅んだ国を興したというのですから、倭国が復興運動に協力して援軍を送るまでに既にかんりの勢力の結集がおこなわれていたと考えることが出来ます。但しここに登場する鬼室福信は武王の甥であり余自進も王族ですから、義慈王に反発していた重臣たちが立ち上がったかどうかはわかりません。僧道琛が福信と共に周留城に立て籠もりますが、仏教勢力も復興運動の大きな力となったのではないのでしょうか。

② 豊璋の帰還

鬼室福信は660年10月佐平貴智らをわが国に遣わして、唐の捕虜100人を奉ります。その捕虜たちは美濃国に住ませたようです。唐の兵士を捕らえたのですから、復興運動はかなりの進展を見せていたと考えられます。福信は倭の援軍を要請すると共に、唐が国王や重臣を俘虜としてしまったので王子豊璋を帰して頂きたいと願い出ました。「百済国は遙かに天皇の御恵を頼りとして、さらに人々を集め国を盛り返しました。今つつしんでお願いしたい



いのは、百済国が天朝に遣わした王子豊璋を迎えて、国王としたいということであります」云々と言ったのに対して、斉明女帝は、詔して述べられました。「危うきを助け、絶えたものを継ぐべきことは当然のことである。いま百済国が窮して、我に頼ってきたのは、本の国が滅んでしまって、依る所も告げる所もないからである。臥薪嘗胆しても必ず救いをと、遠くから申してきている。そ

の志は見捨てられない。將軍たちにそれぞれ命じて、八方から共に進むべきである。雲のようにつどい雷のように動いて、共に沙啄（新羅の地）に集まれば、その仇を斬り、そのさしせまった苦しみをゆるめてやれよう。役人たちは王子のために十分備えを与え、礼をもって送り遣わすように。」

齊明帝は661年7月に崩御され、中大兄皇子が長津宮にあって称制されることになります。8月に皇子は、阿曇比羅夫・安倍比羅夫・物部連熊その他の將軍を百済に遣わして救援させ、武器や食料を送らせます。そして9月に豊璋に大織冠を授け、多臣蔣敷（コモシキ）の妹をその妻とし、狭井連檳榔（アジマキ）や秦造田来津を遣わして軍兵5千余を率いて豊璋を本国へ護り送らせました。豊璋が国に入ると鬼室福信が迎え出て、平伏して国の政をすべて任せました。即ち国王として推戴したわけです。

③ 豊璋は鎌足か

豊璋は中大兄皇子から最高の官位である大織冠を授けられましたが、他にこの大織冠を受けたのは藤原鎌足ただ一人です。だから大織冠といえば鎌足のことを指しています。しかし豊璋がいますからこれはちょっとおかしいということになるのですが、もし鎌足が豊璋であるとするならば決しておかしくないわけです。こんな説を関裕二氏が唱えています。氏は古代史についてのいろいろな疑問を怨念というキーワードで解き明かし、多くの愛読者を持っている人気作家で、歴史学者は見向きもしないようですが、その説はユニークでたいへん興味深いものがあります。

その関裕二氏が「壬申の乱の謎」という著書の中で、「百済王・豊璋＝中臣鎌足」という1項を設けています。（なお著者は「藤原氏の正体」という本の中で詳述したと書いています。）

その論述は、先ず白村江の戦い（次項参照）に敗れたときに豊璋が高句麗に逃げたとする日本書紀の記述に目を向けます。この記述は豊璋のアリバイ工作ではないかと見るのです。即ち、日本書紀編纂のリーダーであった藤原不比等が、父鎌足の正体を抹殺するために、豊璋が高句麗に去ってしまったことにしなければならなかったのではないかと、何故なら、豊璋と鎌足が同一人物だったからと推論します。

豊璋は白村江の戦いの直前に数人と船に乗り高句麗へ逃げたと日本書紀は記しています。恐らく高句麗を目指したのではなく、日本の水軍の中に紛れ込んで倭国への帰還を計ったのではないのでしょうか。豊璋が30年を超える年月を過ごした倭国に再度亡命するのでなく、危険の伴う高句麗への逃亡を選んだこと、そしてその後の消息が全く不明であるということに疑問を投げかける人もいます。鎌足は白村江の戦いの丁度その時、日本書紀の記述から姿を消しています。そして再登場するのは白村江の敗戦の翌年664年5月のことでした。百済を占領した唐の鎮将劉仁願が郭務棕らをわが国に派遣しますが、その使節が10月に帰還するとき中臣鎌足が饗応に当たっているのです。こうしてみると、豊璋が百済に帰国して行方が分からなくなるまでの間と、鎌足が姿を見せていない期間とが一致することになります。何故なのか、その謎は二人が同一人物だったとすれば解けるというわけです。そしてまた、大織冠の地位を得たのが鎌足と豊璋であったわけも自然と氷解するのです。

因みに鎌足が豊璋であったとすると、乙巳の変の見方も大きく変わるということです。蘇我入鹿の暗殺を仕掛けたのが中臣鎌足であることは間違いのないでしょう。鎌足は新羅寄りの蘇我氏を抹殺して百済救援を確実なものにすべく中大兄皇子に働きかけたと言うのです。一般的に言われるように蘇我氏が皇位の篡奪を謀っていたとすれば、皇極帝をはじめ皇族の動きは不可解であり、中大兄皇子だけが突出して行動したことを説明できません。鎌足が豊璋であって中大兄皇子を巻き込んだとするなら説明が通じます。また皇子の百済救援の熱意をみても合点がいくのです。

百済滅亡の本筋とは関係のないお話しですが、歴史の裏面にはこのようなことがあってもおかしくないのではないかと興味を持たれます。歴史は謎の部分が多くその繋がりの中で矛盾する事象も多いのですが、人間の行動が必ずしも合理的なものばかりではなく、客観的な追求がかえって本

質を見誤ることがあるでしょう。人間的な面を思い巡らすのも歴史を楽しくしてくれます。

(2) 白村江の戦い

鬼室福信の要請により倭国は百済の救援に乗り出します。この百済一辺倒の外交的立場に対して多くの批判があったようですが、百済救援はその批判を押し切って国挙げての一大行動でした。

① 斉明女帝の出兵

661年1月6日、斉明女帝は中大兄皇子・大海人皇子・太田皇女らを伴い難波津で武器や食料を調達して出発し西に向かいます。途中でも水軍などを集められたでしょう。岡山県倉敷市真備町には二万という地名がありますが、この時に2万という兵が動員されたのでその名が残っているという言い伝えがあります。2万とは大げさですが大勢という意味でしょう。瀬戸内には昔から海賊のような水軍が勢力を持っていたから、軍功の褒賞を期待して参加した多くの人たちがいたのは間違いないでしょう。14日に船は伊予国熟田津の石湯行宮に泊まりました。今の道後温泉でここで2か月余の滞在をします。

3月25日にここを船出しますが、この時に額田王が詠んだといわれる歌が有名で、当時の高揚した雰囲気伝わってきます。万葉集の巻一に載っています。

熟田津に 船乗りせむと 月待てば 潮もかなひぬ 今は漕ぎ出でな

一行は今の博多に到着し、斉明帝はここを長津（那河津）と名付けられました。4月になって福信の使いがやってきて王子豊璋をお迎えしたいと願い出ました。長津に一緒に来ていた豊璋を、警護しながら無事に連れて帰りたいという福信の思いだったでしょう。斉明帝は5月9日、朝倉橋広庭宮に移られます。博多から内陸に入った地ですが、半島西部を広角的に見た場合には戦略的に見て適地だったでしょう。宮を造営するとき朝倉神社の樹木を切り払って造られたので、雷神が怒って御殿をこわしました。また鬼火が現れて多くの大舎人や近侍が病死しました。そして、斉明帝もまた7月24日に崩御されます。斉明崩御の前日に耽羅（済州島）の王子が朝貢しています。日本書紀には伊吉博徳が耽羅に漂着して王子阿波伎を帝に奉ったと記していますが、恐らく百済への遠征に当たって耽羅との何らかの交渉があったものと思われます。耽羅が入朝するのはこの時が初めてでした。

朝倉橋広庭宮跡



② 豊璋と福信

豊璋が661年9月に倭の軍兵5千に護られて百済に帰還したことについては先に述べましたが、日本書紀には662年の5月に大將軍安倍比羅夫らが軍船170艘をひきいて、豊璋らを百済に送り、百済王位を継がせたとあります。豊璋が正確にはいつ百済に帰ったのか分かりにくいのですが、661年に帰還して662年の5月には王位を確立したということでしょう。

これより少し前の3月、唐と新羅の連合軍が高句麗を攻めて、高句麗は倭に救いを求めました。倭はこれに対して援軍を送り百済復興軍の拠点である州柔(周留)城に立て籠もりました。このため唐の軍勢はその南の境を犯すことが出来ず、新羅はその西の砦を落とすことが出来ませんでした。12月になって豊璋と福信は、狭井連・朴市田来津と相談し、「この都の州柔城は田畝にへだたり、土地がやせている。農桑に適したところではない。戦いの場であって、ここに長らくいると民が飢

えるだろう。避城に移ろう。避城は西北に川が流れ、東南は貯池の堤があり、一面の田圃があり、水利もよく花咲き実のなる作物に恵まれ、三韓の中でもすぐれた土地である。衣食の源があれば、人の住むべきところである。土地は低くても移り住むべきだ」と言いました。田来津がただ一人身を進めて諫めて、「避城と敵のいるところは、一夜で行ける道のりです。たいへん近い。もし不意の攻撃を受けたら悔いても遅い。飢えは第二です。存亡は第一です。今敵がたやすく攻めてこないのは、ここが山險を控え、防御に適し、山高く谷狭く守りやすく攻めにくいからです。もし低いところにいれば、どうしてかたく守り動かないで、今日に至ることが出来たでしょうか」と言いました。しかしついに聞き入れないで避城に移ります。663年2月になって新羅は百済の南部に攻め入って四州を焼き討ちし要地を奪うと、避城はやはり敵と近すぎたのでそこに留まることが出来ず、州柔城に戻らざるを得ない羽目になりました。田来津の言ったとおりになったのでした。

③ 白村江の敗戦

その後倭軍は2万7千の兵を率いて新羅を攻撃しますが、高句麗に対して犬上君を送ってこのことを知らせます。豊璋はその犬上君に鬼室福信に謀反心があると語りました。倭軍に先ず知らせて豊璋は行動に出ます。そして福信を捕らえて諸臣に「福信の罪は明らかだが、斬るべきかどうか」と問いました。達率徳執得が「この悪者を許してはなりません」と言うと、福信は「腐り犬の馬鹿者」と言って執得に唾をはきかけました。そこで豊璋は兵に命じて福信の首をはね、酢漬けにしてさらし首にしました。福信と豊璋の間に大きな対立があったのですが、その前に復興運動のリーダーとして活躍した福信と僧道琛との間に対立があり、気性の激しい福信が道琛を殺害するという事件が起きています。これが内部の抜き難い対立に発展したものと考えられます。

8月になって豊璋が自分の良将を斬ったことを知った新羅は、直ちに攻め入って州柔城を奪取しようとしていました。豊璋は新羅の計画を知り諸將に告げて、「倭軍の兵士1万余が今に海を越えてやってくる。わたし豊璋は自分で出掛けて白村江でこれを迎える。」と言い、城を脱出しました。

8月17日、新羅軍が州柔城を包囲します。唐は軍船170艘を率いて白村江に陣を敷きました。



遠山美都男「白村江」表紙絵より

27日に倭の先着の水軍と唐の軍船が戦いますが、倭軍は破れて退き唐は陣を一層固めます。28日、倭と百済の諸将たちはその戦況を確かめずに「われらが先を争って進めば、敵は恐れて退却するだろう」と言って、負けて混乱している倭軍の船を率いて唐軍の中に攻め込みました。唐軍はそれを左右から挟んで攻撃します。たちまちにして倭軍は破れ退却することも出来ない状況となりました。このとき田来津は決死の覚悟で突進し唐兵数十人を殺害しますが、遂に戦死してし

まいます。白村江に向かっていた豊璋は、船に乗り込んで従者数十人と共に高句麗に逃げのびたと言います。その後の消息が全く分からないところから、多くの憶測を生んでいることは前に述べた通りです。

9月7日、州柔城は唐に降伏しました。このとき百済の重臣たちは倭の将軍たちと相談して倭国への亡命を決心します。そして25日、倭の軍船は佐平余自信、達率木素貴子、谷那晋首、憶礼福留と将兵を乗せて、一般の住民たちは船を出して倭国へと亡命して行きました。こうして百済という国は消え去り、続いて唐・新羅と高句麗の抗争時代へと移ります。

3. 百濟滅亡後の動き

唐の百濟攻撃は高句麗攻撃の前哨戦のようなものだったので、百濟を滅亡させただけで収まりません。新羅も北への進出を図っていましたから、唐と新羅の高句麗への進攻という思惑は一致します。そして高句麗が滅ぼされた後には、新羅が唐を半島から駆逐するということになります。

(1) 高句麗の滅亡と新羅の半島統一

① 高句麗滅亡

661年、高句麗が百濟の旧領北漢山を攻めました。これが新羅と高句麗の戦争への前兆となります。新羅の武烈王（金春秋）はこの年の7月に死没しその子が文武王となります。その頃、唐の高宗は高句麗との戦いを決意して蘇定方を總大将に任命しました。その話が伝わると新羅では武烈王の喪中にも拘わらず、金庚信を大將軍に任命して文武王自らが出陣して高句麗攻撃に向かいました。百濟の復興軍とも戦いながらの高句麗との全面戦争でした。

高句麗は唐との17年に及ぶ抗争によって疲弊していましたが、淵蓋蘇文が榮留王を殺害し宝蔵王を王位に付かせて実権を握ると唐との戦闘が激化します。645年には10万の唐軍が千里の長城の築かれた安市城での戦いで高句麗軍に大敗北を喫しています。その淵蓋蘇文が665年に死亡すると、その息子たちの間に内紛が起こりました。この機に乗じて唐軍と新羅軍が連合して大攻勢を掛けたので、高句麗は668年に遂に滅亡してしまいました。

唐は高句麗の地域を唐の領域とし平壤に安東都護府を設置します。高句麗各地では百濟の場合と同じように復興軍が活躍して部分的な戦乱が続きますが、長引いた戦乱が終わって高句麗の人たちには一時期の平和が訪れました。しかし、高句麗という広大な地域を異国の唐が支配するようになったことは、高句麗・百濟・新羅という3つの国の異質性よりも、韓民族としての同一性に目覚めさせる大きな契機になったのです。

② 唐と新羅の戦争

新羅は高句麗に勝利したものの、半島の大きな部分に唐の支配をもたらしてしまいました。高句麗が支配していた半島北部と遼東地域を唐に奪われただけでなく、新羅の支配する地域にも唐が都護府を置くという結果となり、新羅の支配は不完全なものでした。三国を統一したという意義は大きいのですが、韓民族の支配する領土を結果的に縮小してしまったというマイナス面が残りました。それと共に唐と新羅の初めからの思惑の違い



が表面化するのも当然だったでしょう。

671年7月に唐は新羅の文武王に対して書簡を送ってきました。「唐は百済や高句麗を滅ぼし新羅に安定をもたらしたのに、唐の意向に逆らうのはどうしてか。返答次第ではそのままにしておかぬ。」という趣旨です。これに対して文武王は、「金春秋が唐の太宗に援軍を頼んだときに唐の皇帝は、『百済や高句麗は欲しくない。もし唐が百済や高句麗を平定したならば、高句麗の平壤以南の地と百済の地はみな新羅に与え、新羅をいつまでも平安に保とう。』と言われたのにその約束はどうなったのか。」と問い返しました。高句麗が滅んで唐は平壤以北だけでなく高句麗全土を獲得しようとして、新羅の兵との衝突が各地で起こります。その時、高句麗や百済の旧民たちは新羅側に加わって唐と戦うという姿勢を取りました。更に文武王は「新羅は百済と高句麗を攻撃するために、唐の援軍による協力を得たが、その戦いで唐が困難な状況に陥ったとき新羅はしばしば犠牲を顧みずに助けたではないか。」との書を唐に送ります。反論の妙手を見出せなかった唐は遂に武力抗争に至りました。

新羅では673年7月に金庚信が亡くなります。これを聞いた唐軍の攻撃はにわか激しさを加えました。靺鞨や契丹の兵を加えた唐の軍勢が北辺の国境を侵略するようになりました。675年2月、唐将劉仁軌は新羅の七重城を攻略し、また9月には薛仁貴將軍の唐兵が大攻撃を掛けますが、新羅の將軍文訓が之を撃退します。このように唐と新羅の軍勢は各地で攻防を繰り返しますが、新羅の退くことを恥とする精神に支えられて新羅の軍の士気は高く、花郎道の精神は百済・高句麗との戦い以上に盛り上がりました。唐の李謹行將軍が率いる20万の大軍が買肖城に（現在の京畿道楊州）駐屯しており、新羅としては大変気になる存在でしたが、ここを攻撃して軍馬3万380頭を奪い、多くの兵器を獲得するという成果を挙げました。これは新羅軍の活躍だけでなく百済・高句麗の亡民の協力が大きかったのです。民族意識の高まりが大きき力になったのです。

676年11月、錦江河口に終結していた唐の水軍と新羅軍との激戦が展開されます。初戦においては新羅軍が敗北するのですが、22回に及ぶ戦闘が行われて次第に新羅軍が優勢となり、唐の水軍4千人が全滅させられます。これによって唐は遂に平壤以南の地から撤退して新羅がこれを統合することになりました。しかし高句麗の領土であった北半分は唐の手に渡り、後に高麗国が平壤以北の半島部分を取り戻すまで、半島の一部が唐の支配下に置かれることになったのです。

（2）天智の対唐防衛

① 防人と水城・山城建設

「664年に対馬・杵岐・筑紫国などに防人と烽（ノロシ）をおいた。また筑紫に大堤を築いて水を貯えた。これを水城と名付けた。」と、

日本書紀は記します。倭の朝廷は663年の白村江の敗戦によって、唐・新羅の連合軍がわが国に進攻してくることを恐れて、早速防備体制を取り始めました。実際には唐や新羅はすぐに高句麗との戦争に入り、その後はまた唐と新羅の戦闘の時代となって行って、倭国へ侵入する余裕は全くありませんでした。半島でのこうした動きを倭においても恐らく知っていたでしょうが、余りにも百済一辺倒になってしまっていた斉明・天智の朝廷としては、客観的に状況を考えることが出来な

かったでしょう。665年になると百済からの亡命者たちを遣わして長門国や筑紫国の大野や椽（太宰府西南）に城を築かせます。更に667年には河内国高安城・讃岐国屋島城・対馬国金田城



対馬の金田城

を築きました。いずれも石を積み上げた百済式の山城で、唐の攻撃に対する危機感からあったという間に出来上がったと言います。

金田城の築城には防人が大活躍したでしょう。防人については、大化2年に発せられた孝徳帝の改新の詔の第二に「京師（都城）を創設し、畿内の国司・郡司・関塞・斥候・防人・駅馬・伝馬・を置き・・・」というのがあって、これが防人の語の初出ですが、ここでの意味は防衛兵ということでしょう。サキモリとは読まなかったと思います。防人がサキモリと読まれるのは「崎守」から来ています。半島に面した九州の崎々での防衛に当たる兵士です。当然築城にも参加しました。

防人が制度化したのは663年白村江の敗戦からでした。防人は主として東国から集められたので東国防人という言葉があるほどです。道中の費用は一切自弁で集められた防人は、難波津から船で太宰府に送られ、防人司のもとに入れられて各地に配属され、土地を開墾し食料を自給しながら軍事業務に当たりました。任期は3年でしたが延長されることもしばしばでした。こうした徴兵期間も税は免除されず、農民にはたいへんな負担でしたので防人の士気は低かったと言われます。新羅が半島を統一し、わが国もその新羅との国交を密にするようになると、防人を置く意味もだんだんと薄れていって、奈良時代の757年には九州だけからの徴兵になってしまいます。しかし防人の制度は平安時代まで続き、太宰府が消滅するとともに無くなりました。

なお、防人が実際に戦闘に参加したのは後一条天皇の1019年（寛仁3年）に刀伊（女真族）が対馬・壱岐・筑前に入寇した時の一度だけで、太宰権帥藤原隆家らに率いられて奮戦し刀伊を退けています。

② 近江遷都

667年3月、中大兄皇子は都を近江に移します。そこではじめて皇位を継ぎました。天智天皇です。この遷都は人々に大変な不人気でした。これを風刺する戯れ歌が多く作られ、やけっぱちの放火で火災が多かったと言います。この遷都の意図は唐・新羅に対する防衛上の問題とか、百済救援失敗への反発が大きくて飛鳥に入れなかったとか言われますが、実際はよく分かっていません。

遷都より前に、百済からの亡命者400人を近江国神崎郡に住まわせ田を与えています。また後に佐平余自信や鬼室集斯ら百済人700人を近江国蒲生郡に移住させています。近江国はもともと渡来人の多い土地だったのですが、天智の朝廷では百済からの亡命者を重用しました。築城を百済人に任せたように、亡命者たちが優れた技術を持っていたことが考えられます。亡命者を多く登用するためには旧勢力の抵抗が少ない新しい都が必要だったのです。そしてまた、百済人の多く住む近江は天智にとって心安らぐ場所でもあったでしょう。更に、天智は鬼室集斯らを移した蒲生郡日野を訪問して、宮を造営すべき土地をご覧になったと言われます。このことは天智の当時の心境をはっきりと示しているように思います。



（3）百済王善光

① 難波郡

白村江の敗戦の翌年（664年）に百済の王子善光は難波に住まわされました。百済の人質として来ていた義慈王の2人の王子豊璋と善光の兄弟のうち、兄豊璋は百済復興の期待を担って百済に帰還したのですが、善光はわが国に残っていました。どこに住んでいたのかよく分かりませんが、大和には天智に反対する勢力が多くいて、百済王子に対する圧力もあったでしょう。百済からの人が多く住んでいた難波は善光にとって安全な場所でした。そこには577年に大別王の寺に預けら

れた百済からの僧や学者たちの子孫が住み着き、百済人の町が形成されていたものと思われます。そこが孝徳帝の難波の都の条里の一角に入りました。

そこに善光が送られたのです。善光は百済人たちから百済王子として歓迎されました。そしてその盟主的な存在としての地位を築き上げたのです。氏寺として大別王の寺を発展させて百済寺としたのではないのでしょうか。今、JR環状線桃谷駅の近くにある堂ヶ芝廃寺としてその名残を伝えています。

② 百済王

天智帝は671年12月に崩御されますが、翌672年6月に王位継承を争って天智の子の大友皇子と天智の弟の大海人皇子との間で戦乱が起きます。これが壬申の乱ですが、大海人皇子が勝利して即位し天武天皇となります。天武は高句麗を滅ぼして半島を統一した新羅と積極的な外交を行って半島との関係修復を図ります。天武4年(675)の正月に善光が、大学寮の諸学生・陰陽寮・舎衛の女・墮羅の女・新羅の仕丁などと共に、薬や珍しい物どもを天皇に奉ったと日本書紀は記しています。ここに善光と共に並べられたのは決して貴族といえる人たちではないでしょう。天武の新羅に対する配慮なののでしょうか、善光の出自が百済王家ということを見逃したやり方です。そして善光の名はその後全く見られず、天武天皇が崩御したときの殯になってやっと出てきます。善光に代わって孫の郎虞が弔辞をささげたというのです。子の昌成は既に他界していますので代役として孫が登場するのは分かりますが、善光にどのような事情があったのかと気になるところです。善光の天武に対する感情の現れでしょうか。

皇后が王位を継承して持統天皇が誕生すると一転して朝廷の態度は変化し、善光に百済王(クダラノコニキシ)の姓が与えられます。持統は天武の政治を継承したと言われますが、むしろ天智の政治を継承したと言ってよいでしょう。天武が発案して天武のために書かれたと言われる日本書紀は、実は持統のもとにあって藤原不比等がリーダーシップを取り藤原家の都合のよいように書かれたと考えられています。持統と藤原によって、百済王家も再び陽の目を見るようになったと思われる。姓が与えられたということは百済王家が認められたということだけでなく、百済からの人々の中で善光の権威が確立したことを意味します。またわが国の氏姓としての百済王ですから、百済王家がわが国朝廷の家臣となったことをも意味することになります。こうして百済王家は、これ以後奈良時代を通じ平安時代初期に至るまで政治の中枢で活躍することになります。

4. 陸奥の蝦夷

孝徳の大化改新、天智の近江令、天武の八色の姓をはじめとする制度改革、持統の浄御原令と、この時代には律令制による国家権力の確立が進んでいきます。しかし、本州・四国・九州の中で最後まで支配の容易でなかったのが陸奥国の蝦夷でした。後に百済王敬福(善光の曾孫)が陸奥守として活躍することになるのも、この蝦夷との関係があります。そこで蝦夷について見ておきたいと思います。

(1) 大和朝廷と蝦夷

① 蝦夷とは

今の東北地方には蝦夷がいて、大和の中央政権にはなかなか従わなかったようです。そもそも蝦夷とはどのような人たちだったのでしょうか。戦前には北海道(蝦夷エゾ)のアイヌと同じ縄文人であって、弥生人である倭人とは人種が異なると言われました。戦後では人類学・民俗学の進歩からそれは否定されて、方民説というのが主流になりました。「蝦夷」という観念は、何らかの意味で、中央政権の外に立ってこれに敵対関係にある方民(地方の民)や辺民(辺境の民)を一般的に指す

のが、その本来の用法」であり、「大化改新以降、その地域が奥羽地方に限定される」と「その固有の実質は、東北にいる夷民たちということになってしまった」という高橋富雄氏の主張が定説となってきました。即ち、蝦夷とは人類学・民俗学の問題ではなくて歴史上の問題として捉えられることとなったのです。

最近では遺伝子から人類のルーツを探る研究が進んできて、母から子へと遺伝していくミトコンドリアDNAの特徴を解析し、その分布状態によって人種の同一性を調べることが出来るようになってきました。これによりますと、北海道のアイヌは人種的にはカムチャッカ半島やアリューシャン列島からアメリカ大陸の原住民との繋がりが深く、一方本州や九州・四国においては場所による人種的な差異が殆ど認められないことが分かりました。更に日本と朝鮮半島や中国大陆の中部から北部に掛けての人種も極めて同一性を持っていることも確認されました。これは、旧石器時代からの何万年に及ぶ長い間の混合によって形成されたものです。日本列島には有史以前から大陸との深い交流があったことを表しています。ミトコンドリアDNAは女性によって伝わるものですから、男性だけの移動では広がりません。従って大陸から多くの女性が渡ってきていたということ、即ち民族の大きな移動があったことを示しています。方民説が科学的に裏付けられたのです。

大陸にも縄文人がいました。日本列島だけに縄文人がいて、そこに半島から弥生人が入ってきて同化したとの認識は間違いでした。エゾ地のアイヌと本州の縄文人の間にも交流があったでしょう。東北地方でも青森県には人種的にアイヌに近い人が比較的多いと言われます。アイヌとの交流が深かったためでしょう。しかしそれ以南の蝦夷はDNAにおいて西日本の人たちと全く変わりがないのです。自然環境や生活習慣の違いから骨格などの形成に差異があり、外見的な少々の違いがみられるにしても人種としての違いはありません。こう見ると、エゾと読んだりエミシと読んだりする違いがあるにしても、同じように「蝦夷」と書いているのが誤解を招いているようです。

同じ人種なのに大和ではどうして蝦夷を区別したのでしょうか。九州南部の隼人も同じことですが、辺境の地にあつて経済的にも文化的にも独自のものを持っていて、容易に大和勢力の支配に入ろうとしなかった人々を蔑視して、蝦夷と呼んで区別したものと思われます。大化改新以後の歴史的な出来事と見て間違いのないでしょう。

② 安倍比羅夫の蝦夷征討

日本書記には日本武尊の蝦夷討伐の話があります。それ以後にも応神・仁徳・雄略・清寧の時に蝦夷を討伐したとか朝貢してきたとかと書かれています。倭王武（雄略）が478年に中国宗に上表した文のなかに「東のかた毛人55国を征し、西のかた衆夷66国を服す」とありますが、この毛人とは蝦夷のことでしょう。毛深いという意味で毛人と言ったのでしょうが、ミイラに残っている平泉の藤原3代の姿を見ても決して毛深くはないそうです。容易に服せぬ無骨者とのイメージを作り上げてそう呼んだのでしょう。この雄略の蝦夷討伐は中国に対する権威付けだった可能性があります。その後蝦夷の地を支配した形跡がありませんし、その当時蝦夷という概念も無かったと考えられます。



安倍比羅夫の古戦場 十三湊

蝦夷への対応が計画的に要求されるようになるのは、やはり中央集権的な体制が進んでからです。589年に崇峻帝が近江臣満を遣わして蝦夷の国境を觀させますが、皇極元年（642）9月には越の辺境の蝦夷数千人が帰服し、朝廷で饗応が行われ、蘇我大臣が家に向かい入れて親しく慰問したということが日本書記に記されています。ここに出てくるのは越の蝦夷ですが、太平洋側の蝦夷

を「陸奥の蝦夷」というのに対して日本海側の蝦夷を「越の蝦夷」と言っています。当時の大和から奥羽へのメインルートは、日本海に沿って北上し越の国を通して出羽に達するものでした。越にも蝦夷がいたでしょうが出羽にいる蝦夷も含めて越の蝦夷と言っていたのです。この642年というのは、百済最後の王である義慈王が皇族や高官を追放し、王子翹岐らがわが国に亡命してきた年に当たります。

645年に乙巳の変があり大化改新が行われますが、改新を進めた孝徳帝は東国へ派遣する国司を集めて諫め言を述べます。その中で「辺境で蝦夷と境を接する国、すべてその武器を数え調べ、元の所有者に保管させよ。」とされています。国司がすべて我が物にして私利を得、土地の豪族らから反感を持たれ敵対されないようにと諭したものです。大和側に立っている地方豪族たちの心を引き留めて、国司のリーダーシップによって蝦夷対策を立てさせるための処置でした。そして647年には淳足柵（信濃川の河口の辺り）を作り、648年には磐舟柵（新潟県村上市岩船町）を作って蝦夷に備えます。ここには越と信濃の民を移して柵戸（屯田兵）としました。大化改新を契機として積極的な蝦夷対策が進められたのです。

この時期で有名なのは安倍比羅夫の遠征です。比羅夫は662年に豊璋を百済に送り届けた将軍ですが、斉明4年（658）越の国守であった時の4月に180艘の水軍を率いて蝦夷討伐にのぼりました。淳足や磐舟で準備を整え北進を開始します。比羅夫の大規模な進攻に対して、全体としてのまとまりのない蝦夷は抵抗するすべもなく、秋田・能代の蝦夷は比羅夫の軍勢を見ただけで降伏しました。比羅夫は更に前進を試み津軽まで進攻します。渡島とありますのでエゾ地（北海道）との見方もありますが、当時海路でしか行けなかった津軽半島と見るのが妥当のようです。

第2回目の遠征は660年に行われました。百済が滅亡した年です。その時は前回を上回る200艘の大船団です。船団が北進して大きな河のそば（十三湊）まで行くと、渡島（津軽半島）の蝦夷が宿営していました。その中から2人の蝦夷が掛けてきて「肅慎（ミシハセ）の船がやってきて我々を殺そうとしている。助けてくれ。」と言いました。比羅夫の軍勢は肅慎と戦い多くの犠牲者を出しますが、大和に帰還した比羅夫は、肅慎人49人と熊2頭、それに熊の毛皮70枚を朝廷に献上しました。

肅慎人とは何者か、中国では東北地方の辺境に住む異民族を総称する言葉で、特定の人種や民族の名前ではありません。比羅夫が戦ったのはその異民族ではなくてアイヌを指しているようです。エゾ地に住むアイヌは海峡を渡ってしばしば津軽にやって来ていたようで、平和な交易を行うと共に略奪も行っていたのでしょう。比羅夫の軍勢はたまたま略奪に押し寄せたアイヌと遭遇したことになります。アイヌを肅慎人としたのは間違いですが、当時の知識として北の島からやってきた人たちはすべて肅慎人としたのでしょう。しかし重要なことはここで蝦夷と肅慎を区別していることです。大和朝廷においては蝦夷を異国人とは見ていなかった証拠ではないでしょうか。

③ 大野東人

陸奥の蝦夷はどうだったのでしょうか。奈良時代に入った720年に蝦夷の反乱があり、征夷将軍多治比懸守がこれを鎮圧します。その後間もなく大野東人によって蝦夷開拓の本拠地として多賀柵が築かれます。多賀柵は今の多賀城市のところで、以後奥羽開拓の拠点となりました。

727年に高句麗の後身として建国された渤海国の使者が出羽の能代に漂着し、24人のうち16人が蝦夷によって惨殺されるという事件が起こります。蝦夷としては肅慎の来寇と勘違いし抗争したのかも知れません。こうした蝦夷の行動への対策だったのでしょうか、733年には最上川の河口付近にあった出羽柵を、雄物川付近（秋田市付近）に移し



ました。淳足柵・磐舟柵から前進していて設けられていた出羽柵を、更に北上させて蝦夷の地の真中まで進出させたのでした。

737年正月、陸奥按察使兼鎮守將軍の任に着いていた東人は、多賀柵と出羽柵の連絡路を拓くために、その間の山岳地帯にいる蝦夷を討伐したいと願い出ます。もともと日本海側の開発が先行していたのですが、多賀柵を築いた後は、宮城平野を横断して4つの柵を築くなど、太平洋側でも北方への開拓を進めていました。しかし蝦夷の地を完全に掌握するためには、太平洋側と日本海側を結ぶことが重要であり、そのためにはどうしても蝦夷の地を通して奥羽山脈を貫く道が必要です。渤海国との交易においてもこのルートが必要だったでしょう。そして3月から4月にかけて、東人は騎兵のうちの精鋭196騎、鎮兵499人、陸奥国の兵士5000人、帰順した蝦夷249人を率いて遠征し、奥羽山脈を横断し、男勝村の蝦夷を帰順させて連絡路を開通させました。この功により東人は参議に任じられています。

百済王善光の曾孫敬福がこの大野東人のもとに陸奥介に任じられたのは738年のこと、この連絡路が開かれた翌年でした。渤海国使節の擁護は重要な課題でしたから、半島の状況に明るく武力を背景に持った百済王は、渤海と蝦夷の両者に対応出来る得難い人材だったのでしょう。

(2) 渤海使節の来朝

わが国に使節を送ってきた渤海とはどのような国だったのでしょうか。

① 渤海国

676年以後、滅んだ高句麗領土の大同江以南は新羅の支配下に入り、遼東地域は唐に帰属しました。しかし中国の東北地方の中東部や朝鮮半島東北部には唐も新羅も勢力が及び難い地域がありました。ここを居住地とするのは靺鞨族が主ですが、遼西地域にいた靺鞨族が唐の圧政に対して蜂起すると、この地に強制移住させられていた高句麗の遺民が合同して唐に抵抗し、追撃する唐の軍勢を撃破して、高句麗系靺鞨人である大祚榮が遂に牡丹江流域の吉林省敦化県に都を定めて震国（渤海）を建国しました。698年のことです。唐は国内の諸族の反乱処理に没頭されていて渤海の建国を容認せざるを得ませんでした。

韓民族が主体となって建設した国であり、南には新羅が存在していますから、926年に渤海国が滅亡するまでの230年間を半島では南北朝時代と呼んでいます。当初は震国（振国）と称していましたが、713年に大祚榮が唐に入朝することによって渤海郡王に封冊されると国号を渤海に改めました。また、一時期には高麗という称号も使っていて、高句麗の継承という意識の強さが窺われます。しかし中国からは靺鞨族が建国に関わったことから、渤海靺鞨と呼ばれていたようです。

このような見方の相異は現代にまで尾を引いているようで、中国では渤海を唐の一地方政権と位置付けます。大祚榮が唐から渤海郡王に封冊されたのですから一理あります。一方韓国では、新羅と対立して興った王国と位置付けし南北朝時代の北朝と考えています。独立の国として唐や日本と交易関係を持っていたのですからこれも一理あります。渤海の領土であったところは今、北が中国、南が北朝鮮に属しているのですが、領土に対する立場は歴史的に見てもなかなか難しい問題のようです。

719年第2代武王が即位すると対外的膨張を続け、国家体制を整備していきます。新羅とは敵対関係が続いていますが、720年代になると唐が再び遼東から東北地域に進出し、渤海の周辺を脅かしはじめます。これに反発した渤海は周辺への攻撃を行うと共に、わが国に使節を送って友好



大祚榮に扮する
チェ・スジョン

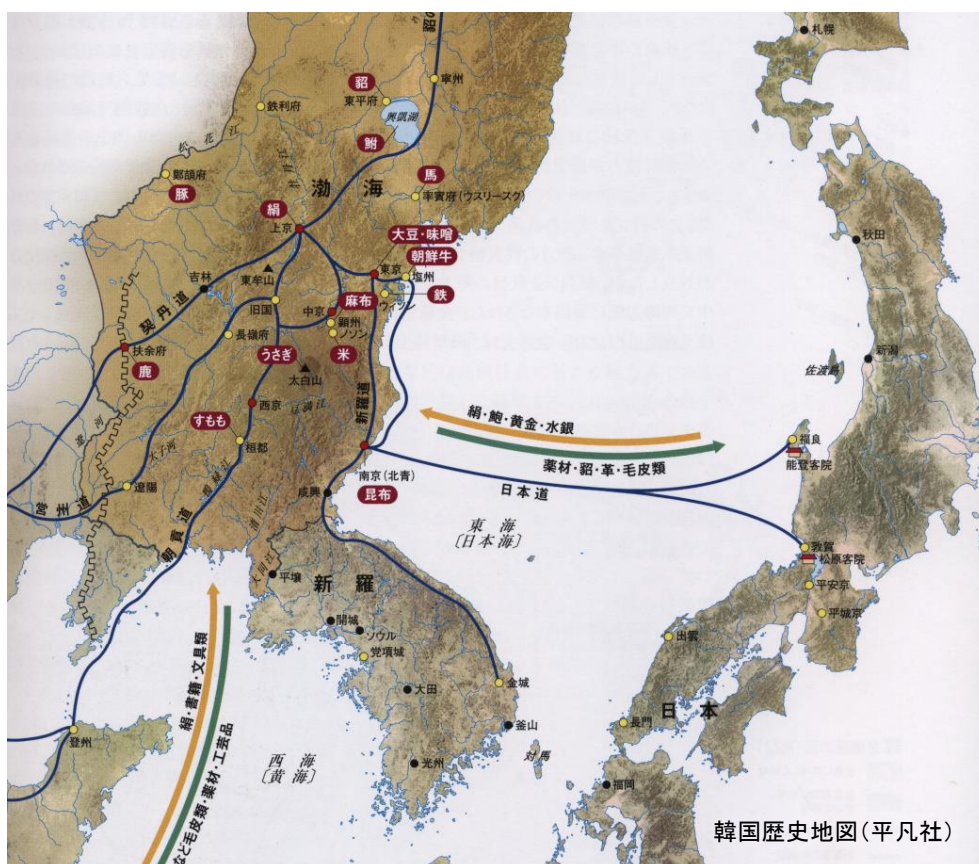
関係を結びました。唐や新羅に対する軍事的同盟が主たる目的でした。渤海使節が出羽国に漂着するという事件はまさにこの時期に起こったのです。

漂着した渤海使節のうち8人が大和に入って聖武天皇に謁見しました。渤海の国書は無事に届けられたのですが、その中に「本枝百世」という言葉がありました。本枝とは元は一つであったものが枝分かれしたということで、渤海と倭国は兄弟関係にあると言うのです。どうして兄弟なのかというと、国書は「渤海は高句麗から出ており、高句麗も日本も元は同じ扶余」だからと言っています。扶余とは高句麗を建国した朱蒙の出たところです。百済は朱蒙の子温祚によって建てられました。百済の都扶余もこれに因んで付けられた名前です。扶余に都が移ったときには国名も「南扶余」としていました。従って百済も同根です。日本もまたこれと同根だというのは、天皇がその筋の出自であるということを行っているのでしょう。少なくとも渤海の武王はそう考えて国書を書いています。聖武天皇がこれに対して不快感を示すことなく友好関係を進めていることを見れば、当時このような認識もあったのかも知れません。渤海の国書はこうして日本に対して軍事的友好関係を結ぼうというものでしたが、わが国としても新羅に対する牽制の意味もあり、交易の利もあるところから使節を送るなどして友好関係を結びます。翌年には早速渤海へ使節を派遣しています。

こうして新羅の脅威を押さえ込みながら渤海は北東方面に勢力を拡充して広大な領土を築き上げます。737年に王位に着いた文王は、高句麗の旧地の回復を目指して外征を繰り返し、唐との交易も盛んに行いました。都を上京竜泉府に移して唐の制度を積極的に取り入れました。文王の統治は60年近くに及びましたが、この間に文化的にも著しい充実を見せ対外的にも大きな地位を占めるようになりました。全盛期には三国時代の高句麗が保有した領土の4倍にあたる規模にまで拡大したと言われています。渤海国は最後には台頭してきた契丹によって滅ぼされてしまいます。

② 渤海使節と百済王

渤海の最初の使節渡来は軍事的色彩の濃いものでしたが、渤海にとって交易は極めて重要な意味がありました。国自体もそうですが都も北に偏っていたために、農産物をはじめ生活必需品を自国で十分に供給できませんでした。ただ狩猟による毛皮や薬品などの貴重品を産出したためそれをもって唐や日本と交易を盛んに行いました。わが国には渤海の産物だけでなく、唐からの文物がいろいろと持ち込まれました。



た。渤海を通して磁器の名品唐三彩も入ってきました。因みに渤海と新羅の交易はあまり活発ではなかったようです。国境付近では民間による交易は当然盛んに行われたでしょうが、三国時代から

の政治的対立が交易の発展を妨げていました。

渤海にとって大切な日本との交易は、平安時代の926年に渤海が滅亡するまでに合計34回に及んでいます。第2回の使節渡来は739年のことで、その前年738年に百済王敬福が陸奥介に就任していることは何か意味があるように思われます。737年に多賀柵と出羽柵の間の道が完成し、陸奥と出羽の防備や開拓は一つに結ばれました。使節の渡来を知った朝廷が、その防衛のために敬福を派遣したことは容易に想像されます。

渤海使節の渡来は回を重ねる毎に構成人数が増えていきます。渤海にとって日本との交易は大きな利をもたらし、交易量が膨らんでいったものと考えられます。771年の第7次使節団は船17艘で324人、第11次には359人がやってきています。ある時には1000人を超える人数に及んだと言われます。渤海使節は形式的には日本への朝貢とされたため、わが国では使者を大いに歓待しました。この財政負担が膨らんでいきましたので後期になると使節来朝を12年に1度と制限するほどでした。

渤海国から潮流の激しい日本海（東海）を渡るとなると、航海に慣れた渤海の使節でもなかなか思い通りの場所に辿り着けません。到着後の交通の便を考えれば丹後から能登あたりまでの間に着くのがよく、当然そこを目指してやって来るのですが、思うに任せず漂流して裏日本の各地に上陸しています。初期の頃には出羽への漂着が多かったようで、それは蝦夷に交易品を奪われるという危険の多いものでした。

第2次の渤海使節の到来に際して百済王敬福が陸奥介に任じられたと考えられるのは、第1次使節渡来の際に起こった使者殺害事件を渤海国が取りあげて、使節警護をわが国に要請したことは当然あり得ることだからです。敬福は後に天皇を警護する外衛大将に任じられているように、百済王一族の強力な武力を背景に持っていたと思われます。勿論武力を持った豪族は多くいたでしょうから百済王が選ばれたのにはそれなりの理由があったでしょう。それが「本枝百世」だったのではないのでしょうか。高句麗と同根の百済を出自とする百済王家、朝廷はこの点を重視して敬福を選んだものと思います。

そして敬福に続いて下記のように多くの百済王家の人たちが出羽守に任じられ、渤海使節警護と蝦夷への対策に当たりました。

- | | | |
|-------|--------|-------|
| ・763年 | 天平宝字7年 | 百済王三忠 |
| ・766年 | 天平神護2年 | 〃 文鏡 |
| ・774年 | 宝亀 5年 | 〃 武鏡 |
| ・785年 | 延暦 4年 | 〃 英孫 |
| ・797年 | 延暦 16年 | 〃 聡哲 |

● 蝦夷の阿弭流為（アテルイ）

蝦夷の中で最も有名なのは阿弭流為でしょう。枚方にも関係がありますので付記しておきます。阿弭流為のことについては続日本紀に2度出てきますが、先ず桓武8年紀に征夷將軍紀古佐美との戦いが記されています。

紀古佐美は胆沢に進攻する前に衣川に軍を駐屯させていましたが、5月末に桓武天皇の命を受けて4000人の軍勢が北上川を渡って進み、阿弭流為のいた辺りで蝦夷軍300を見て抗戦しました。初戦は朝廷軍が優勢であったのですが、蝦夷軍には800が加わり、別働隊400が現れて後方を塞ぎ朝廷軍を挟み打ちにしました。これによって朝廷軍は壊滅し、戦死者25人、矢を受けて

渤海の陶磁器



傷ついた者245人、川で溺死した者1036人、裸で泳ぎ帰った者1257人という大損害を受けました。紀古佐美の遠征は失敗に終わったのです。

802年に行われた大伴弟麻呂と坂上田村麻呂による遠征軍と蝦夷の戦いについては詳細が分らないのですが、蝦夷軍は破れて胆沢郡・紫波郡から一掃されます。田村麻呂は胆沢に胆沢城を築きました。阿弭流為と母礼（モレ）が500余人を引き連れて降伏します。2人は田村麻呂に従って7月10日に平安京に入りました。田村麻呂は阿弭流為の人徳に感じて、2人を帰して仲間を降伏させようと提言しました。しかし、貴族たちは「蝦夷は野生獣心、反復して定まりなし」と反対し、2人を処刑するよう決定しました。阿弭流為と母礼は8月13日に河内国で処刑されました。その地は「植山」「梶山」「杜山」との記述がありますがはっきりせず、この名は河内に存在しません。植山については枚方市宇山が比定されています。宇山は江戸時代に

「上山」が改称されたものであるところから推定されたのです。調査の結果これはほぼ否定されたのですが、平成19年（2007）宇山の牧野公園内に「伝阿弭流為・母禮の塚」の石碑が建てられました。また、田村麻呂が創建したと言われる京都の清水寺境内には、平成6年（1994）に「阿弭流為・母禮顕彰碑」が建立されています。

